



極の首途

天



~ 5
6637
1



門 5  
除 籍  
卷 一

5  
6637  
1



橋のそ途

新刊序詞

藤年 潔 氏遺愛之記

一 米舎

陶里

お是老人ハ多ぶと正門ノ入  
凡雅々抑あて理ハ  
さハ先万物自然の  
恍惚ハ花のよ  
吟一もハ  
二十余

明治 35 年 4 月 24 日  
藤年 海 氏書

<2002-26(1)>

となく本心を二念の井に  
里の人のあつて書きたり  
あつた人あつておつておつた  
ちんとやうな心とこころ  
官位はと免といひ堂の老母  
いふかゝるまかせの志標  
あつた其事のつらつら  
乃る乃る乃るく 明鑑なる志

有て教仕のらるる祖家なる  
いふかゝるまかせの志標  
あつた其事のつらつら  
乃る乃る乃るく 明鑑なる志  
あつた其事のつらつら  
乃る乃る乃るく 明鑑なる志

市人ちへいこのりてはるる  
 たりとあふさひの進んた  
 ちへいさのりてはるる  
 市人ちへいこのりてはるる  
 大の飛葉れはるる  
 市人ちへいこのりてはるる  
 ちへいさのりてはるる  
 市人ちへいこのりてはるる

南越の方へゆく  
 陸路もあつ  
 海の上もあつ  
 莫き道へも  
 ちへいさのりてはるる  
 市人ちへいこのりてはるる  
 ちへいさのりてはるる  
 市人ちへいこのりてはるる

従来もあつた今無り知の  
途なれども乃のなきをひく  
者といふさる好書もあるれ  
ゆるり門た梅たれり徳力の  
目も達やんと世に首途  
消流いづくも山をなほ人く  
一日子女のちひあつた祝の神  
わくわく健あるゆを今もゆたか

百韻

陶里

花かゝるいかに心あはれ  
恋ひの恋た儘きぬま  
種あたまもいふと下はぬ  
花いふさうとをた啼く  
中流子れあり花のちる  
吟りくさるる文机さ  
清き月もいふも心  
花をくくはれ木のこ

百韻

二

長篇  
なま  
ゆた  
月知  
梅古  
花  
子吟

あふとさうりて葉吹合ふ 魯行

笑ふれハ梅も折るき余る 気澄

雨のうらと翅折乾く桂進日 心交

西の山へ吹く風 得し

惟も花の松の枝捨乾さる 如圭

流るん酒はあふし折る 芋捨

之ぬくすけも汗のまじりぬ 東波

舟もよるも舟の歌うら 飛鳥

こ舟くと風あかり希れ声 美濃

世氣の足も成るの枝 佳橋

ちよの向ふも若れ強村よん 乙尾

か魚いと風一折るは流権 乙卯

梅咲てありの氣も白く人 赤松

冬凍るれえはわらうと 磯夕

こゝろもあはれあはれあはれ 逸木

春もあはれあはれあはれ 六橋

あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは

雲

雲

雲

雲

雲

雲

雲

雲

あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは  
あまのこゝろをいふは

雲

雲

雲

雲

雲

雲

雲

雲

花とは芳子のとまじりかたて  
 うらみおまの廊下  
 伽羅の糸も急ぎ鳴らさ  
 新巻の糸も急ぎ鳴らさ  
 日の影が中を運きくちの月  
 春も船とてふもさだ  
 揚子江の舟を控ひて政のつと  
 波をわくと海を渡る

浮月  
 左交  
 鳥喧  
 鳴る  
 柳陰  
 知る  
 一  
 花が

夷を首おとるもれは代  
 月かめあふちの原を耕し  
 三つうらみとて浮葉の寺集  
 膳二八の暮る切の街  
 橋のうらみとて大文の若はる  
 生かしのあふ枝は花の清  
 三つうらみとて大文の若はる  
 花のうらみとて大文の若はる

仁川  
 李固  
 古葉  
 茂力  
 達勢  
 花流  
 杜門  
 柳下

花下





并に... 日... 宗

... 入... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

... 宗

飲て飲る目先びとる青苑 瓶之

心者ハこんきぬ水清 一板

月暮一詠ハ子き入流の者 玉葉

子と捨る氣とやえて免わぬ 素蘭

之國の梓心余承のこふり 公位

どくふハ急隔ハつて毒飯 亦と

あまをものえひらけきるけり 喰と

そくくくくくくくくくく 多此

傘のふくくく行馬よけて 素雅

雪のりくくくくくく 葉々

我のれをまき紙の丸は 梅二

ふくくくくくくくく 茶辭

名録

和列の句ハ世に於て  
世をれとていふこと

初鷹や軟心二日此月のな 子吟

軒より下に暮るハ乾くも標  
 陶里  
 さ。の雨の音のこゝろに声  
 素静  
 魚は背もよみよるの川の  
 流流  
 元らも凡くくして暮業は  
 得い  
 鳥の音や水の流る消かくれ  
 之江  
 山の隈に月道をとめぬ  
 亦ふ  
 水梅のうらやまのあ月相  
 曉こ  
 ちもみよふ月見くもま田ふ  
 奈江

目はおや移るれとちる標  
 一流  
 ありや海より早るまは護摩  
 赤栄  
 草よのむや京れ白ひのそめれ  
 免珠  
 神さく燈りのあふるは  
 呂相  
 雄とや鞠の調子もちのた  
 梅衣  
 之幅のまうあつるの音  
 文鳥  
 卯のむとあて背戸の音  
 乙比  
 稲葉の碎きそちるあなれ  
 素蘭

後つゝの野に雁あり 残月

上ノ條 以川

あまの舟はさかき 舟入り

宗茂 順昌

海苔て煮る ぬきと井北後

西ノ 足守

ちりねははらふをこの小壺

如圭

まのねやこの契も 瀬のち

改田 仁徳

お川のほろほろとさしてらる

柳清

あつてゆく葉よよけあつたも

芳橋

あふあふり人こゝろあふあふ

揚のま 逸永

きんぎょのさしづめ

神水

あまの舟はさかき

首好

あまの舟はさかき

本田 泉島

あまの舟はさかき

李逸

あまの舟はさかき

尾記 志保

あまの舟はさかき

川ノ 佳橋

あまの舟はさかき

松野 友守

あまの舟はさかき

文島

龍吟く竹細くしらんの大なる 東波  
 梅雨時かきまきま白く行路所 六嶺  
 雲梅かあしををふ雨の軒 紫の  
 鳥くく枝にありて為さるる 隼松  
 己月お竹柳小あた遠ふ雨煙 なる交  
 常よりかきく人縁あるは見え くら  
 ふよのまらしとみと次く散き流 ぬきの  
 ふたあしむふおふれは桃のむ 花よあ

ふ花よとくふ心持をいふは月 ありよ  
 花よあしむふおふれは桃のむ くら  
 常よりかきく人縁あるは見え くら  
 ふよのまらしとみと次く散き流 ぬきの  
 ふたあしむふおふれは桃のむ 花よあ  
 己月お竹柳小あた遠ふ雨煙 なる交  
 雲梅かあしををふ雨の軒 紫の  
 鳥くく枝にありて為さるる 隼松  
 梅雨時かきまきま白く行路所 六嶺  
 東波  
 龍吟く竹細くしらんの大なる

ねをわさるのふらふらなを  
 白曉  
 さらばねんた時ごうのさ  
富永 磯夕  
 後りもくたなぬもさる  
 磯夕  
 村あぢねもぬり響の声  
 反響  
 へんねんつらつと移りけ  
十の 倉  
 宿まここの子の宿へ行く思ふ  
 認知  
 校らもさるさるぬ  
 宿夕  
 提一巻のふたはさるふたはさる  
 宿夕

陰ねのうらむと遠く大井川  
 宿夕  
 夕もぬり神もぬり宿の宿  
 宿夕  
 磯夕のあつらふねはねもさる  
スミタ 遠心  
 ねんねんて宿もさるを抽る  
 宿夕  
 宿もぬりやらるまふ二日月  
 杜川  
 ひいひい宿もぬり宿もぬり宿  
 西宿  
 宿夕もさる宿の止るに宿も  
 季宿  
 夕もぬり宿もぬり宿もぬり  
 宿夕

乃かきかゆふ心づかぬたあうく  
 玉葉  
 其かきかゆふ心づかぬたあうく  
 板屋  
 一いふ心づかぬたあうく  
 公様  
 其かきかゆふ心づかぬたあうく  
 祓祭  
 一いふ心づかぬたあうく  
 左相  
 其かきかゆふ心づかぬたあうく  
 長下  
 一いふ心づかぬたあうく  
 長下  
 其かきかゆふ心づかぬたあうく  
 長下  
 一いふ心づかぬたあうく  
 長下

障のまゆ舟外にねまふまき中 カク 其な  
 秘書よえまうあうく クロ 深丸  
 ちるまねまふ大柄ふ格うか 古川 格下  
 名くうり活ふも別て子なる 野村 直培  
 格下と活てまうく今あの手 教 教の  
 打つたのまうく 中 中  
 遠くもまうくのまうく 達 達  
 まま 日 日



りしむくとして宿入りく 大河 里路

野ハ雅子の名おのれて八重夜 清水 岐比

まらぬやれよきもろものか 漆 鳥岐

清きもの斬きさうれ末久 東野 只景

音は春かこして黒一雉の海 里乙

吹くきてハ流ハきく一初胡蝶 毛洲

幸しくハあらう向ふ旅の移道 イシ 松前

ねや文一物と結なむ都一と 坂夕

乙月ぬやなつても揃る年の度 逸切

盃と家てらぬ物流るゝ舟 一

亦の子んゝゝぬやなれうい乃 一

月さくぬ澄目ちくし土目 一

海凡やとくハ森今ゝゝるさく 一

山と離れずとるさして不二 か 秋子

凡ささくハ後さの一枚を そ 奈夕

み午ややう大境に雨の飛り ま 呼交

横井

初高女とて行ふ物日誌 王就

卯月廿七日水とて行ふ物日誌 西丸

腹水

横井

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

そと

東西に獨歩して諸人とまろの地は汝を  
はまらして月といふやれぬを凡雑の事とて  
我ハ官舎にぞれあさく君君とあふまろ  
此の地の諸病とあひ出る月とてあふまろ  
龍井の事とあふまろはかてあふまろ  
凡そ余をみる命今ハ世を此の事とて頭とて  
九女を此の事とてあふまろはかてあふまろ  
事とあふまろはかてあふまろ水とあふまろ





かほらとあつらひのちりしきまのあゆと  
いしあつらひのちりしきまのあゆと  
都外よりあつらひのちりしきまのあゆと

あつらひのちりしきまのあゆと 六井 文柳

名録 四

茅の根のちりしきまのあゆと なな  
流の乾ふか減ちまのあゆと 八  
と月雨のちりしきまのあゆと 九

舟のちりしきまのあゆと 十  
火車ちりしきまのあゆと 十一  
なつとちりしきまのあゆと 十二  
舟のちりしきまのあゆと 十三  
舟のちりしきまのあゆと 十四  
舟のちりしきまのあゆと 十五  
舟のちりしきまのあゆと 十六  
舟のちりしきまのあゆと 十七  
舟のちりしきまのあゆと 十八  
舟のちりしきまのあゆと 十九

松竹よりなるわんち丸け 里産  
 草花のまよひのまよひ 来て水よ 公の 巴交  
いふことありていふことありて 有花  
 軍部の後七午入のまよ 六井 了夕  
 ねんのはらと海らちの月 い 子  
 遙れれみくくの果は 織りぬ 桂南  
 くれれと月當は半七度なる 柳正  
 蓮花の入物の傍に けしき ま 亭

里人のまよひ 梅のついで 合記のまよ 文柳

いふことありていふことありて 天正

清くもどに目まよひを 途なる ホツレ 思ひ

日 いふことありていふことありて

夢の声もくものめか いふことありていふことありて 梅

文音

丘をれ 樓はく いふことありていふことありて 月夜 いふことありていふことありて

葉のまよ 投細は目とく いふことありていふことありて 実由

江よりついで豊集のしるし 杏種  
 咲のちりり舟新しと暮 曾流  
 板ハ又香たよとあ川梅のむ 亦也  
 ちやや雨と狭ゆる車道 文司  
 心骨や魚のうみのりふち 梅巨  
 高旅やふ海むしととせえ 裡石  
 高栗に被りるる重部ふ 天王 免曉  
 木狭と進くし餘の葉と外 可昌

虫余のやがや井のあふ女と鶴 巴  
 ねとこれぬるさよとやなる末と 井伝  
 紫のりふくしとゆふと越りぬ 女 叶如  
 下校とつづねとあふ初雨 小野 里水  
 物けしとさの言し小夜子も 大栗 可巻  
 ちややひさしとあふく草のあ 推命 高亦  
 ちややと海もさるるた巻うら 神保 巻巻  
 鳴るるちややとあふ 石谷 板免

終止

三

城田寺 松南

松南 葉の

里桂 葉の

惟石 葉の

一義 葉の

文荷 葉の

のん 葉の

文流 葉の

一瓢 葉の

柳蛙 葉の

桂鳥 葉の

李山 葉の

如柳 葉の

春止 葉の

李中 葉の

松南 葉の



梅うすくしんふんあふるれ うぬ 大権

ふくしんふんあふるれ うぬ 耕甫

遠くしんふんあふるれ うぬ 田舎

次々く傘れらりやあの方 右尾 英司

まねや柳の歌く丹を形 石畑 松亭

わーしんふんあふるれ 初之 王

あふるれ 初之 川

あふるれ 初之 茶

あふるれ 初之 月 枕を

あふるれ 初之 珠 珠盤

あふるれ 初之 舟 舟

あふるれ 初之 舟 舟

あふるれ 初之 舟 舟

もは

あふるれ 初之 舟 舟

ま〜〜む方をもふるとをききよその  
いふいふく東南山にありて  
海の中はり柳のまきか海にこして  
ちうく余波とちいなる、彼の揚列の  
美貫と放りて杖頭を録し  
樹下石上の宗景法ともかきし  
あて旅り旅のそ途をいふはれ

葛屋

驚いたまふ業をいふに杖を靴

りいふに杖をいふを

七瀬坊

東家ましくむらもまのいほく 極布  
あてもいふいふは羅の竿 仲秀  
海やいておの月さる久しう 必方  
水さるう鷹さしてちれ 無羅  
も指えはらある由并り流 甚得  
貨地流れて多めらと人 化石  
浮まも世々のまはれを配り 如急  
為るにゆりさるる 雙草

のきりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりけりる舎里ハ種前 水産  
 乾むらぶらう繁のひらき 坊  
 果報くし麻てゆとぬ 金  
 浪きて長煙と梅の又まう 秀  
 二十日とぬ金孫鶴のち 布  
 大いふ敵のおらぬ噴おけ 瓶  
 酒と急とさうと長はけ 方

ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎  
 ちりぬきあつては 初協 桐崎

大短あり

名録

雅子 寄書 依之 の 重 北 為 湖 橋 市  
 七と 訪り きたり せし ぬれ ぬ  
 あつ こと あり きたり きたり きたり  
 板 寄 こと あり きたり きたり  
 浮 遊 今 人 こと あり きたり  
 こと 月 心 こと あり きたり  
 事 磨 こと あり きたり 杜 事  
 化 石

事 寄 こと あり きたり きたり  
 事 寄 こと あり きたり きたり  
 杜 事 こと あり きたり きたり  
 雙 南 こと あり きたり きたり  
 曲 水 こと あり きたり きたり 橋 延 鳥 宿  
 都 事 こと あり きたり きたり 水 の 味

庭へ花をのりてくゝる 塚市

休るるはむらりる 舟中

目のあつちんはくちん 舟中

ほむ

小島の嶺をくぐる

橋のきりぎりすはくちん 舟中

舟のあつちんはくちん 舟中

くちんはくちんはくちん

花のきりぎりすはくちん 舟中

花のきりぎりすはくちん 舟中

八句表

花のきりぎりすはくちん 舟中

花のきりぎりすはくちん 舟中

花のきりぎりすはくちん 舟中

花のきりぎりすはくちん 舟中

花のきりぎりすはくちん 舟中

つれて酔とさゆと桐下 鳥翔

ちりひらとあつた月今宵 居並

早稲田の海見ハ先達の地 松戸

名録

行き方きくくさる昔れ塔 五西

向きよららるるさるららら 子時

新米のうすしきさるらるら 子風

飯時つは歴もあつたくく 鳥羽

おめらたおめらたおめらた 居並

魁とるるるるるるるるる 松戸

浮歴の浦

月れおめらるるるるるるる 坊

向きつはあつたあつたあつた 丸

所へあつたあつたあつたあつた 古

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あうなる松の葉の端よかひりたる  
松の地と接して虫いふは清浄  
松のうらみの葉の影のふかき  
叶よのくさくさかき葉の影を  
松のくさくさかき葉の影を  
ささめぬ舟の影を

松の葉の影を  
坊

松の庫

松の葉の影を  
九

楠子と墓

志はれえや芳一はま中  
坊

楊磨

高砂

おしんもちる松や雪  
坊

和月朝日ハ松野のこゝちも  
松の葉の影を  
松の葉の影を

吹くて流るる月をみれば

龍野

まきのわしとまろひて

古梁坊

夕凡と抱くまろひる月

流るる月をみれば

古梁坊

龍野の遠るに鳥作子とまろひて

二階堂の遠るに鳥作子とまろひて

まきのわしとまろひて

古梁坊

まきのわしとまろひて

まきのわしとまろひて

古梁坊

短歌一折

古梁坊

まきのわしとまろひて

まきのわしとまろひて

古梁坊

まきのわしとまろひて

古梁坊

まきのわしとまろひて

古梁坊

まきのわしとまろひて

古梁坊

まきのわしとまろひて

古梁坊



と、ゆらりたる世をゆくは、  
ホ夕

目小く、  
主編

ふせいの笛や大鼓とあるは、  
有為

は、まのこころの奥なる  
都国

袖をよほさるゝと、  
晴東

糸山に、  
筆

名録

戸敷、  
陽東

順礼の志、  
二味

おとろ、  
都国

あつ、  
雨了

夕、  
海作

背、  
文川

鶴の園、  
文編

即、  
有為

川、  
東越

